

地域貢献・子育て支援イベント「げんき村3丁目わんぱく通り」の 企画・運営を通じた社会人基礎力の育成¹

向 居 暁²

Training for “Syakaijin Kisoryoku” by planning and managing the regional contribution / parenting support event called “Genkimura 3-chome Wanpakudori”.

Akira Mukai

要約

本論の目的は、高松大学発達科学部子ども発達学科の学生有志によって企画・運営されている子育て支援、地域貢献イベントである『げんき村3丁目わんぱく通り』（2010年10月開催）の活動を通して、それに携る学生たちの社会人基礎力がどのように育成されるのかを論じることである。企画・運営に携った学生に対するアンケート調査から、将来的に小学校教諭、幼稚園教諭、保育士として働くための社会人基礎力におけるどのような側面がこの活動によって育成されたかを垣間見ることができた。また、大学の教員養成・保育士養成課程における社会人基礎力育成の課題について論じられた。

キーワード：社会人基礎力育成、課外活動、学生主体、地域貢献イベント、子育て支援

(Abstract)

The aim of this paper is to discuss how student involvement in activities concerning “Genkimura 3-chome Wanpakudori (regional contribution/parenting support event held in October 2010)” can have a positive impact for training for “Shakaijin Kisoryoku (basic abilities to work in society)”. The students who had engaged in the activities responded to a questionnaire on these abilities after the event, and it revealed that they thought that these experiences were beneficial for developing their qualities and abilities supposed to be needed to work in society, especially as an elementary, preschool or

¹ 本研究は社会人基礎力グランプリ2011中国・四国地区予選大会で発表された原稿を大幅に加筆・修正したものである。

² 提出年月日2011年11月30日、高松大学発達科学部子ども発達学科准教授

nursery teacher. Problems accompanied with fostering these abilities at teacher-training courses at university were also discussed.

Key words : basic ability to work in society training, extracurricular activities, student initiative, regional contribution event, child-raising assistance

1. はじめに—生きる力・人間力・社会人基礎力・学士力—

近年の学校教育改革において、「生きる力」が重要視されてきた。この生きる力は、知・徳・体のバランスをさし、それぞれ「確かな学力」、「豊かな人間性」、「健康・体力」の3つの側面から構成される（中央教育審議会，1996）。この理念をさらに発展させたものに「人間力」がある。人間力とは、「社会を構成し運営するとともに、自律した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」とであると定義されており、その構成要素として、「知的能力的要素」、「社会・対人関係力的要素」、「自己制御的要素」があげられ、これらを総合的にバランスよく高めることが人間力を高めることであると考えられている（人間力戦略研究会，2003）。ここでは、「教育とは、何のために、どのような資質・能力を育てようとするのか」ということが具体化され、そして、社会における「生きる力」を、主に「職業生活」という場面で発揮することがより重要視されている。

しかしながら、学校教育では、社会における自己実現を基本的な理念としているものの、現実には、教科学習を中心としたアカデミズムと、学校組織という枠という中での社会性の涵養に重きがおかれ、産業界からの要請に直接応えようとするには抵抗感が強いこともまた指摘されている（人間力戦略研究会，2003）。加えて、「生きる力」および「人間力」のいずれにおいても、学校教育場面という特性からか、知的な側面（および、学習意欲）がより強調されている印象があり、就職時に社会（企業など）が求める能力と、学校が考える生徒・学生の能力にギャップが生じているのが現状である。すなわち、学校教育と現実社会の間に解離が見られているといえる。このような解離を克服するために期待されているのが、「社会人として活躍するために必要な能力」や「仕事の現場で求められる能力」に焦点を合わせ、「組織や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」と定義される「社会人基礎力」である（経済産業省，2006）。

経済産業省（2006）は、社会人基礎力を構成する主要な能力として「前に踏み出す力（アクション）」、「考え抜く力（シンキング）」、「チームで働く力（チームワーク）」の3つの

要素に整理している。「前に踏み出す力」は「一歩前に踏み出し、失敗してもねばり強く取り組む力」として、「考え抜く力」は「疑問をもち、考え抜く力」として、「チームで働く力」は「多様な人とともに、目標に向けて協力する力」とされ、これらの3つの主要能力は、それぞれが社会人基礎力を構成する不可欠な要素であり、相互につながりが深いものであるとされている。そして、これら3つの主要な能力は、さらに12の能力要素に細分化されている。それぞれ、「前に踏み出す力」は「主体性」、「働きかけ力」、「実行力」、「考え抜く力」は「課題発見力」、「計画力」、「創造力」、「チームで働く力」は「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」、「ストレスコントロール力」から構成されている（表1）。このような能力が求められる度合いに関しては、業種や企業、業務の内容などで異なるであろう。

このような社会人基礎力は、職場や地域で社会人として活躍するために必要な能力の一側面ではあるが、これだけで十分であるとはいえず、「基礎学力（読み、書き、算数、基本ITスキルなど）」、「専門知識（仕事に必要な知識や資格など）」、「人間性・基本的な生活習慣（思いやり、公共心、倫理観、基礎的なマナー、身の周りのことを自分でしっかりとやるなど）」と関連し、重なり合っている（経済産業省、2006）。これら4つの側面は、様々な経験を通して相互に作用しながら、循環的に成長するとされている。そして、大学教育を含む学校教育の中で育成が可能な能力として位置づけられている。

大学教育における質の保障のための指針として、中央教育審議会（2008）は、大学卒業までに学生が最低限身につけなければならない能力を「学士力」と定義した。学士力は、「専門知識、基礎学力、社会人基礎力、人間性・基本的な生活習慣」という領域全体を包括しているのが特色である（経済産業省、2010）。表2は、この学士力と社会人基礎力の関係を示したものである。表2にもあるように、社会人基礎力は、学士力の中では、汎用的な技能の中の、「コミュニケーション・スキル、論理的思考力、問題解決力」、そして、「態度・志向性」の「チームワーク、リーダーシップ、倫理観など」、そして、「統合的な学習経験と創造的思考力」に、多く含まれている。つまり、社会人基礎力の育成の観点に立てば、これらの能力・スキルの育成は、専門知識・基礎学力の育成と必ずしも別々に行われるものではない（経済産業省、2010）。また、社会人基礎力の向上が専門知識・基礎学力への修得への意欲につながり、専門知識・基礎学力が一定レベルに達した後、社会人基礎力の向上が、問題解決力、チームワーク、リーダーシップなどの育成を通して促されれば、専門知識・基礎学力も問題解決プロセスを経験することで再構成され、よりレベルの

表1 社会人基礎力における12の能力要素と定義（経済産業省，2006より）

分類	能力要素	内容
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力 例) 指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む。
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力 例) 「やろうじゃないか」と呼びかけ、目的に向かって周囲の人々を動かしていく。
	実行力	目的を設定し確実に行動する力 例) 言われたことをやるだけでなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む。
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力 例) 目標に向かって、自ら「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する。
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 例) 課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし、「その中で最善のものは何か」を検討し、それに向けた準備をする。
	創造力	新しい価値を生み出す力 例) 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える。
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力 例) 自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらうように的確に伝える。
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力 例) 相手の話しやすい環境をつくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す。
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力 例) 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する。
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 例) チームで仕事をすると、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する。
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力 例) 状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する。
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力 例) ストレスを感じるがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する。

高いものになるとされている（経済産業省，2010）。

したがって、社会人基礎力の育成において、問題解決場面や集団における行動が求められる場面を設定し、同時に、個人の専門知識や基礎学力を高める場面が設定することが、これらの能力を循環的に成長させるために重要になると考えられる（結果的に、学士力も向上する）。この目的を達成するために、大学教育における正課（授業）の充実とともに、社会や企業における実際の課題解決策をチームで検討する学習法（PBL：Project Based

表2 社会人基礎力と学士力（例）の関係（経済産業省，2010より）

学士力（例）		「職場や地域社会で必要となる能力」
知識・理解	専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解	他文化・異文化に関する知識の理解 → 専門知識、基礎学力、人間性・生活習慣など
		人類の文化、社会と自然に関する知識の理解 → 専門知識、基礎学力、人間性・生活習慣など
汎用的技能	知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能	コミュニケーション・スキル → 基礎学力、 発信力 、 傾聴力 、 柔軟性 など
		数量的スキル → 基礎学力など
		情報リテラシー → 基礎学力など
		論理的思考力 → 基礎学力、 課題発見力 、 計画力 、 創造力 など
態度・志向性	自己管理能力 → 主体性 、 実行力 、 計画力 、 ストレスコントロール力 、人間性・生活習慣など	
	チームワーク、リーダーシップ → 主体性 、 働きかけ力 、 実行力 、 計画力 、 発信力 、 傾聴力 、 柔軟性 、 状況把握力 、 規律性 、 ストレスコントロール力 、人間性・生活習慣など	
	倫理観 → 基礎学力、 主体性 、 実行力 、 規律性 、 ストレスコントロール力 、人間性・生活習慣など	
	市民としての社会的責任 → 基礎学力、 主体性 、 実行力 、 規律性 、 ストレスコントロール力 、人間性・生活習慣など	
	生涯学習力 → 基礎学力、 主体性 、 実行力 、 計画力 、人間性・生活習慣など	
統合的な学習経験と創造的思考力	自らがたてた新たな課題を解決する能力 → 専門知識、基礎学力、 主体性 、 課題発見力 、 計画力 、 創造力 など	

Learning) が推奨されている（経済産業省，2006，2010）。

PBLは、目的を達成するための方法や解も一つではないため、指導者の専門知識、指導方法、または、指導対象者の専門知識、職業志向によって、どのようにでも展開な教育方法とされている（詳しくは、経済産業省，2010参照）。PBLのテーマとして、「学生の知識やスキルのレベルを把握し、チャレンジングではあるが、難しすぎないもの」、「学生の学びに近く、興味をひく『魅力的な』内容であるもの」、「ゴールを明確にしたもの」、そして、「学生が段階的に思考を深め、随所に意思決定や判断をする場面があるもの」が適切とされている。また、PBLの成功の基準として、「学生が主体的に取り組み、自分たちで解決策や対応を考え、実行することができた」、「チーム内の誰か一人が負担をかぶるのではなく、全てメンバーがそれぞれの役割を果たした」、「チーム内に対立や紛糾があつて

も、あきらめず改善に向かう行動ができた」、「学んだ知識やスキルを実際に使い、机上の学びと現場との違いを実感することができた」、「最初に設定したゴールに到達し、その成果を効果的な形で発信することができた」というものがある。社会人基礎力という概念が提唱されて以来、その育成のために、多くの大学がPBLを活用し、成果を上げている（経済産業省，2010参照）。

次節では、高松大学発達科学部における社会人基礎力育成につながる取り組みを紹介する。

2. 高松大学発達科学部における社会人基礎力育成につながる取り組み

高松大学発達科学部子ども発達学科は平成18年度に開設された、比較的新しい学部・学科である。ほとんどの学生が、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、または、特別支援学校教諭になることを志して本学部に入學しており、実際、平成21年度、22年度卒業生の7割強が、保育士、幼稚園教諭、または、小学校教諭として就職している。本学部では、上述したような学校教育改革の流れ、加えて、社会人基礎力や学士力といった、大学教育における学習成果を重視する傾向に従って、学科経営目標の一つとして「人間力の育成」を掲げている。そして、この目標と、本学の建学の精神の一つである「自分で考え、自分で行なえる人間づくりをめざす大学」にもとづいて、「学生主体の文化」を形成することを目指している。つまり、発達科学部においては、学生の意志・判断で行動することが重要視されていると所属学生一人ひとりが理解すること、ひいては、学生個人において「この発達科学部を所属学生自らの手によって主体的に創り上げていくのだ」という意識を形成することを目標としている。その成果として期待されることの一つに、学生の主体性の育成がある。社会人基礎力においても、主体性は、社会が学生に求める最も重要な能力要素として位置づけられている（経済産業省，2006，2010参照）。本学部では、このような目標を達成するために、学部教員の協力のもと、ゼミナール単位の活動、または、ゼミナールの枠組みを超えた様々な学生の活動が支援されている。それらの活動には、上述したPBLといえるものもいくつか存在する。

まず、学生による新入生学外セミナーの企画・運営がある（向居・田中・松原，2008参照）。発達科学部第一期生から始められた、新入生を迎え入れるための学外セミナーを企画・運営する活動であり、学部の特色の一つとなっている。この活動には、結果的に初年

次の学生全員が参加することになるため、その後の学生活動の基礎となる初年次教育の意味合いも強い。また、「ゼミ連絡会」という学生による自治組織が編制されており、学年ごと、また異学年協同で行事を企画・運営するなど、学生の活躍の場が提供されている。加えて、ゼミナール単位の活動（和田浩ゼミナール）として「高松大学読み聞かせ隊」が、公共施設をはじめ、様々なイベントで読み聞かせや手遊びなどを披露し、活躍している。このような読み聞かせの活動は、高松大学附属図書館との連携のもと、学内においても「たーちゃん えほんひろば」と称して実施され、発達科学部の学生が地域の親子と交流する機会を設けるとともに、地域の子育て支援に貢献している。そして、本稿の主題である「げんき村わんぱく通り」もまたPBLと呼べる活動である。

げんき村わんぱく通りは、高松大学発達科学部学生有志によって、2008年に「げんき村1丁目わんぱく通り」としてスタートした。毎年継続し、それがイベントの名称に反映されるようにと、学生のアイデアをもとにして、2009年には2丁目、2010年には3丁目となり、回数を重ねるごとに「○丁目」の数字の部分が増えていく仕組みになっている。地域の子どもたち（主として、幼児から小学校低学年まで）やその保護者を対象としており、学生が主体となって考案した、普段の生活では体験できないような遊びやその場所を提供し、子どもたちに楽しんでもらうことを目標としている。高松大学発達科学部においては、大半の学生が保育士、幼稚園教諭、小学校教諭志望であるため、このような活動を通して、大学の授業で学んだ知識や技術を、就職する前に、実際に発揮する機会を持つことが可能となる。このような活動に主体的に取り組むことは、将来的に子どもたちから「せんせい」とよばれる職業に就くものにとって、有益で貴重な体験となるに違いない。

本来、学生の主体性が十分に発揮されるのはサークル活動などの課外活動であろう。しかし、本学においては、そのような活動に積極的に取り組む学生が少なく、大学のサークルに対するサポート体制も十分であるとはいえないことは、向居他（2008）で指摘されているとおりである。経済産業省（2006）においても、大学時代に部活動やサークル活動に全く参加しない学生が4割強存在することが危惧されている。このように学生の主体的な活動機会が少ない中で、学部・学科単位で、学生に主体的な組織運営を求めることは、社会で必要とされる主体性、そして、社会人基礎力を身につけるために重要となり、学生にとって貴重な経験になると考えられる。

このように、高松大学発達科学部では、教員の協力のもと、様々な学生の活動が支援されている。そのため、学生や教員の間に、学生が主体となって活動し、それを教員が支え

るといふ意識形成がなされ、学生の主体性が育成されるような文化が発達科学部に根付きつつある。特に、本学部の卒業生から地域で活躍できる「せんせい」を輩出するためには、学生の主体性を実際の地域の現場で発揮する体験となる活動を推進することが必要となる。

本稿では、高松大学発達科学部で行われているPBLのひとつで、2010年度で3年目を迎えたイベントである「げんき村3丁目わんぱく通り」の概要を説明し、当イベントと社会人基礎力の関連性を詳述する。

3. 「げんき村3丁目わんぱく通り」概要

げんき村3丁目わんぱく通り（以下、げんき村3丁目）とは、高松大学発達科学部学生有志38名による、地域の子どもたちのためのイベントである。げんき村わんぱく通りというイベント自体は、本年度で3回目（だから、3丁目）になり、2010年度は、10月16日（土）・17日（日）の高松大学・高松短期大学大学祭にあわせて開催された。高松大学2号館を使い、たくさんの子どもたちを楽しんでもらえるよう、学生主体で様々なアトラクションや催し物を企画・運営した。げんき村3丁目では、2日間で、延べ約1500人の来場者を数えた³。げんき村3丁目は大きく6つの催し物で構成される（図1参照）。また、高松短期大学保育学科による「ほいくのくに」も同時開催された（図2参照）。以下、それぞれについて簡単に説明する。

3.1 お菓子の森のアトラクション

ストーリーに従ってゲームを攻略する巨大迷路アトラクションであり、げんき村わんぱく通りにおいて最も重要な企画である。高松大学2号館の2105・2106講義室全体を使い、テーマパークのアトラクションのような催し物を企画し、運営する。このアトラクションのテーマは、げんき村全体のテーマとも関連するために、学年はじめの会議において入念に検討される。げんき村3丁目では、「お菓子の森」がテーマとなったために、そのテーマに従ってストーリーが考案され、それにあわせて学年ごとにゲーム内容が検討された。

げんき村3丁目のアトラクションは、導入部分の「シアター」、3年生担当の「玉入れ

³ 本稿を執筆している時点で、2011年度の「げんき村4丁目わんぱく通り」が無事終了し、前年を上回る約1800人の来場者を数えたことを付記しておく。



図1 「げんき村3丁目わんぱく通り」案内図



図2 高松短期大学保育学科「ほいくのくに」案内図

ゲーム」、2年生担当の「宝探しゲーム」、1年生担当の「魚釣りゲーム」、最後に4年生担当の「ケーキの立体パズルゲーム」、そして、それぞれのゲームブースをつなぐ通路から構成されていた。シアターでは、まずアトラクション内の「冒険」をガイドする役割の学生数人がアトラクションについて説明する。そして、物語が始まるのだが、主人公であるヒツジから電話がかかってきて、プロジェクターのスクリーンを通じて、入場者である子どもたちとインタラクティブできるようになっている。ここで、冒険の目的が子どもたちに説明される。その後、子どもたちはそれぞれのゲームを攻略するたびに、次の課題が示され、最後はヒツジの家でケーキの立体パズルを完成させて、記念写真を撮り、出口へと向かう。それぞれのゲーム内容は、学年ごとに考案、作成される。複数のゲームを攻略し、参加した子どもたちが達成感を味わえるように工夫されている。今回は、ゲームを終了するごとに動物たちからフルーツをもらい、最後のゲームでケーキを作った際に、そのフルーツでケーキを飾り付けるといったものであった。

それぞれ4つのゲームの様子は、後に紹介する「やすめルーム」に設置されているスクリーンに4分割画面で放映された。アトラクションの所要時間が約30分にわたり、そして、基本的に子どもたちだけで参加することになっているため、アトラクション内の様子を画面で見ることができるとは、保護者にとっても安心であろう。

3.2 げんき村ひろば

エレベーターホールに人工芝をひき、円筒状のエレベーターを木のように装飾して、そこを広場に見立て、協賛企業である朝日段ボールから提供されたダンボール遊具（すべり台、木馬など）を設置した。ここでは子どもたちが体を使って遊ぶことが想定されるために、転倒等の際の安全性について特に配慮がなされた。また、お菓子の森というテーマにあわせて、「お菓子の家」が階段下に作られた。そのお菓子の家に、やすめルームで作成したお菓子の塗り絵を貼ることができた。また、天井はカラーポリ袋で作成された帯によって、虹が架かったように装飾され、テーマにそった楽しい雰囲気味わえるように工夫された。

3.3 やすめルーム

高松大学2号館2101講義室を利用した休憩室（兼、工作室）のことである。上述したように、迷路アトラクション内に設置されたカメラにより、休憩しながらアトラクション内

部の様子を観察することができるようにしている。また、お菓子の森というテーマにしたがって、お菓子の塗り絵やペーパークラフトを用意し、自由に工作ができるようにした。作成したお菓子の塗り絵は、これも上述したように、げんき村ひろばにあるお菓子の家の内部に貼ることができるようにした。また、講義室後部の壁下半分に模造紙を貼り、クレヨンや色鉛筆を置き、自由に落書きができるようにした。

3.4 げんき村市場

香川県知的障害者福祉協会の協力のもと、香川県の福祉施設で製作された商品を委託販売する場所である。また、げんき村市場担当ゼミナール（田中良子ゼミナール）の学生が作成したパズルやモビールなどのおもちゃも販売した。げんき村3丁目からは、新たに、げんき村オリジナルグッズの缶バッジやステッカー、そして、げんき村3丁目のテーマにあわせて学生によって作成された、お菓子やケーキの手作り消しゴムもまた販売された。

3.5 げんき村劇場

先に紹介した、高松大学読み聞かせ隊による読み聞かせを披露するために設けられた場所である。両日とも午前と午後に1回ずつ、計4回の実演が行われた。また、高松短大保育学科音楽研究室によるハンドベルコンサートも1日1回ずつ開催された。すべての実演が終了した後は、大型絵本が展示されており、来場者は自由に閲覧することができた。

3.6 つみきの部屋

協賛団体である公益財団法人オイスカ四国研修センターから借り受けた10000個にもおよぶ檜の積み木を体験してもらうために用意した場所である（図2）。日常生活においては、このように多数の積み木で遊ぶことは皆無といってよいだろう。げんき村に携る学生には同団体が開催する「森の積み木インストラクター養成講座」を受講している者もあり、保育園や幼稚園で実施する「森の積み木広場」にボランティアとして参加している。

3.7 ほいくのくに

高松短期大学保育学科1年生が中心となって、研究室（大学のゼミナールに該当する）単位で実施する催し物であり、大学祭にあわせて、げんき村3丁目と同時開催され、主に2号館2階を使用して実施された（図2）。今回は、「ストーリーランド」をテーマにして、

研究室ごとにある物語を題材とした遊びを考案がされた。「はいくのくに」は、げんき村よりも低い年齢の子どもたちを対象にしており、幅広い年齢層の子どもたちに来場してもらえることが可能となるため、げんき村わんぱく通りがより充実したイベントとなっていることは間違いないだろう。

4. げんき村3丁目の年間活動と活動内容

げんき村3丁目の年間活動を表3に記した。学内では、4月中旬にげんき村の活動に携る「げんき村住人」の募集をし、新しく、げんき村3丁目の構成メンバーを決定した。集まったげんき村住人の中から、げんき村3丁目村長、副村長、書記などの役職を決定した。そして、村長をリーダーとして、テーマ決定や役割分担を行い、7月上旬から制作活動を本格的に開始した。学内での制作作業と平行して、学外では、協賛企業・団体との交

表3 「げんき村3丁目わんぱく通り」の年間活動

2010年度	学 内	学 外
4月中旬	「げんき村住人」募集・集合	
5月上旬	親睦会	
5月中旬	テーマ決定	
6月上旬	イベント構成、ゲーム内容の決定	高松短大保育学科との合同会議
7月上旬	製作作業開始	塗料店と打ち合わせ
8月（夏休み）	各担当・各学年の作業	段ボール会社と打ち合わせ
9月下旬	ポスター完成	ポスター・チラシ配布 子育て支援団体と打ち合わせ
10月上旬		ラジオ・テレビ番組出演 「かがわ育児の日フェスティバル」参加
10月15日	前日準備	
10月16・17日	「げんき村3丁目わんぱく通り」開催	
11月上旬	打ち上げ、反省会	
12月上旬		「社会人基礎力育成グランプリ」参加
12月下旬		「高松冬のまつり」参加
2月下旬		「四国ガス みんなきまいガス展」参加

渉を行った。また、9月下旬にポスターが完成した後は、ポスターやチラシの配布、「かがわ育児の日フェスティバル」といった子育て支援イベントに参加するなど広報活動に重点を置いた。10月15日・16日の両日にわたって、げんき村3丁目が開催されたが、その後すぐに中心となる3年生のほとんどが教育実習に入るため、反省会は実習終了後に行われた。

また、2010年度のげんき村3丁目から学外のイベントに「出張げんき村」として参加することが増えた。先に挙げた、かがわ育児の日フェスティバル、高松冬のまつり、また、四国ガス主催のイベントに参加し、その活動の幅を広げた。加えて、げんき村3丁目の活動を紹介するラジオ番組やテレビ番組に出演したり、高松冬のまつりでの活動の様子がテレビ放映されるなど、「げんき村」の活動だけでなく、設置されて数年しか経っていない高松大学発達科学部の広報にも役に立ったと考えられる。このような活動内容は、「げんき村わんぱく通り」の公式ブログでその都度報告されており、どのようなプロセスで学生が活動しているのかといった情報が入手可能となっている。

このような活動内容は、げんき村住人の会議で決定される。げんき村における会議には、主に「全体会議」、「学年別会議」、「担当別会議」の3つで構成されている。まず、全体会議は、週1回、放課後に1～4年生のげんき村住人が集まって、各学年、各担当の進行状況の確認や、問題点の相談、意見の統合が行われる場である。げんき村のテーマの決定、げんき村の構成要素の決定など、げんき村全体に関わる重要な決定はこの会議でなされる。また、全体会議の議事録は、その都度、発達科学部の掲示板に掲示され、学部学生や教員に周知される。次に、学年別会議は、授業の空き時間や放課後を利用し、各学年で集まって、迷路アトラクション内のゲームについて討議する場である。また、他の学年と相談すべき内容や、作業の進行で発生した問題点など、全体会議にかける議題についても話し合われる。学年別だと、授業の空き時間が比較的合いやすいために、毎年変化するアトラクションの内容を精査するために多くの時間を費やすことが可能となる。最後に、担当別会議は、異学年で構成されており、空き時間や放課後を利用して、げんき村ひろばや、やすめルームなどの担当場所ごとで、企画・運営について話し合う場である。担当場所別に外部企業や団体との交渉を行っており、次年度への引き継ぎが必要なために、異学年で構成されている。

このように、げんき村村長を中心とした全体会議が全ての中心であり、あらゆる情報を共有する場としている。その中で、学年別会議、担当別会議での決定事項の報告、作業、

広報活動の進行状況の確認、様々な面で生じる問題の把握と解決を行っている。このようなプロセスを繰り返しながら、げんき村3丁目は本番を迎えた。いうまでもなく、これら全ては学生主体で行われる。

5. げんき村3丁目終了後のアンケート調査—社会人基礎力との関連性

げんき村3丁目の活動と社会人基礎力のそれぞれの項目、および、大学で学ぶ一般教養や専門知識の成長について、イベント終了後の10月下旬から11月上旬にかけて、げんき村住人38名にアンケート調査を行った。以下の項目は、その結果を要約したものである。以下の項目において、特に制作作業の過程において当てはまるものには [作業]、特にげんき村の企画検討のための会議に当てはまるものには [会議]、げんき村3丁目当日の運営に関するものには [当日]、これらすべて、つまり、げんき村3丁目活動全体において当てはまるものには [全体] と記す。

5.1 前に踏み出す力 (アクション)

(1) 主体性

- ・自分の将来に繋がると考え、すべての活動を積極的に行った。[全体]
- ・「子どもたちの笑顔」のために、様々な活動を頑張った。[全体]
- ・誰かの指示を待つのではなく、自らやるべきことを考え、行動した。[作業]
- ・子どもたちと積極的にコミュニケーションがとれた。[当日]

(2) 働きかけ力

- ・「一緒にやろう」とげんき村に加わってくれるように声を掛けた。[全体]
- ・笑顔で接することを意識し、作業や会議で行き詰った異学年の顔さえも笑顔に変えた。[全体]
- ・担当の場の人数が不足している時、周りの人に協力を求めた。[当日]
- ・経験者が指揮をとり、周りの人たちを動かしていた。[作業]
- ・多くの学部学生に趣旨を理解してもらい、目標を共有し、製作作業を手伝ってもらった。[作業]

(3) 実行力

- ・「子どもたちを楽しませる」という目標を設定し、当日までの制作作業、当日の運営

をやり遂げた。[全体]

- ・何度も同じ作業で嫌になったが、投げ出さずに最後まで粘り強くやり遂げた。[作業]
- ・装飾のための木を100本作るという高い目標を立て、多くの木を製作した。[作業]

5.2 考え抜く力（シンキング）

(1) 課題発見力

- ・子ども目線で意見を出し合い、どうすれば子どもたちに危険がなく楽しんでもらえるかを考えていった。[作業]
- ・毎年の反省を踏まえ、年々良くなるように改善をしていった。[会議]
- ・一つの見方だけでなく、いくつもの視点から物事を考えるようになった。[作業]
- ・げんき村3丁目初日終了後、アンケートに目を通し、問題を見つけ、2日目には改善できるようにした。[会議]

(2) 計画力

- ・最終的には「子どもたちのために」ということを目標にし、意見等を出し作業行った。
[全体]
- ・ポスターを配る際、「いつ、どこに、誰が配布するか」と細かく計画を立てて配った。[作業]
- ・担当ごとに、当日に向け、誰が、いつまでに、どの段階まで製作作業を進めるか計画を立てた。[作業]
- ・外部団体との交渉の際にも、細かく計画を立てた。[会議]
- ・製作作業の際、限られた費用で収まるように努めた。[作業]

(3) 創造力

- ・アトラクションを決める際、子ども目線で考え、どんなことが楽しいか、どうあれば楽しいと感じるかを意識して取り組んだ。[全体]
- ・1丁目と2丁目の過去のげんき村より良いものができるよう、過去にしたことを知り、活かしながら新しい発想を生み出した。[全体]

5.3 チームで働く力（チームワーク）

(1) 発信力

- ・話し合いの中で、自分が感じた疑問を素直に伝え、全体の意識へと変化させていっ

た。[会議]

- ・外部企業と交渉する際、自分たちの目標・目的を伝え、理解・協力をしてもらえようにした。[全体]

(2) 傾聴力

- ・みんなの意見を聞き、その人が今どこで悩み、考えているのかを理解し、それに対して意見を出し合い、お互いを高めることができた。[会議]
- ・自分の意見だけでなく、他の人の意見を取り入れることのできる環境を作ることができた。[作業]

(3) 柔軟性

- ・げんき村で、1～4年生のそれぞれに意見を言いやすい環境、聴き入れる態勢が整えられるよう、普段から異学年間のコミュニケーションを大切にされた。[会議]
- ・自分の意見が他の意見とぶつかってしまった際、自らの意見だけに捉われることなく、第三者の視点に立って考えるよう心がけた。[会議]

(4) 状況把握力

- ・当日、各場所で人が足りないところを見つけ、率先して動き、運営がスムーズになるようにした。[当日]

(5) 規律性

- ・学生以外の人と関わり、企業や外部団体の担当者と打ち合わせを行うことで、社会人としての適切な言動が身に付いた。[全体]
- ・施設の使用時間、全体会議の時間、授業が多い中での作業との兼ね合いなど、限られた条件の中で、その場その場のルールを守り、ルールに基づき作業を行った。[全体]
- ・苦情に対する保護者への対応を行う際に、適切な言動を心がけるようにした。[当日]

(6) ストレスコントロール力

- ・飲み会、食事会、カラオケ等の娯楽によりストレスの解消を図った。[全体]
- ・「子どもたちの笑顔のため」、「自分の成長のため」だと意識することで、ストレスを作業意欲へと昇華させた。[全体]

5.4 大学で学ぶ一般教養や専門知識の成長

- ・授業で得た知識を活用し、子どもの発達段階に合わせ、子ども目線で内容を考えた。[全体]

- ・身近な材料を使うことにより、将来、「せんせい」になってからも活かせるようにした。[作業]
- ・製作を通して、様々な技術を習得した。[作業]
- ・保護者対応等、実習では、体験できないことを体験した。[当日]
- ・園では見られない子どもの姿や保護者と子どもの関わり方を見ることができた。[当日]

このように、げんき村の活動に携った、げんき村住人たちは、「げんき村で子どもたちに楽しんでもらう」という大きな目標を共有しながら、それぞれがそれぞれの目標を持ち、それぞれの役割にしたがって目標のもとに計画を立て、困難に立ち向かい、目標達成のために計画を実行する課程で、将来的に小学校教諭、幼稚園教諭、そして、保育士になるために必要だと考えられる様々な社会人基礎力を身につけていったと感じていることがわかる。

ただ、げんき村のような活動は、単に社会人基礎力といった就職に必要な能力を身につけるためだけにあるのではない。本節の最後に、2010年12月3日に広島で行われた、経済産業省主催「社会人基礎力養成グランプリ」中国・四国地区予選大会において、げんき村3丁目村長である河辺春香さんが発表の終わりに述べた発言を記しておく。

げんき村の活動を振り返ると、特に準備の段階では、意見がぶつかり、悩むことがありました。そんなときは、「子どもたちの笑顔のために」という目標を再確認し、先輩や先生から助言をもらうことにより、次第にチームワークが生まれ、ひとつひとつ乗り越えて行くことができました。そしてげんき村当日、「また来るね」と笑顔で帰って行く子どもたちを見て、目標が達成できていたことに気づき、げんき村の成功を実感することができました。また、それと同時に、来年は、もっとたくさん子どもたちと出会い、子どもたちが「また来たい！」と思えるものにしたい、と強く思いました。

社会人基礎力ももちろん大切ですが、私たちは、げんき村を通して、同じくらい大切なものを見つけました。それは、一緒に頑張ってきた「仲間」です。

6. 問題と今後の課題

経済産業省によって掲げられた社会人基礎力、そして、文部科学省によって掲げられた学士力のいずれも、大学教育における学習成果の重視を反映したものである。逆に言えば、冒頭にも述べたように、大学教育が社会の要請に答えていないという証拠といってもよい。しかしながら、教員養成や保育士養成において、このような社会人基礎力育成を試みるためには、その能力要素、および、それぞれの具体例と評価項目などの有用性を「確認」し、必要ならば、それぞれの事項における改訂する作業が求められる。そもそも、社会人基礎力は一般企業の担当者を中心にして考案された「会社員向け」の概念であるため、「学校教員向け」として学校教育現場のことを特に意識して作成されたものではないからである。もちろん、一般企業においても、その業種や仕事内容に応じて、求められる社会人基礎力のそれぞれの能力要素項目における重要度は異なってくることはすでに記したとおりである。教員や保育士も「社会人」であり、学校教育現場においても、社会人基礎力としてあげられている能力要素は必要となることは間違いない。特に、教員の質の向上が叫ばれ、教員養成や免許制度の改革が行われている中（中央教育審議会、2006）、教員に求められる資質能力を教員養成課程で確実に育成することが必要とされている。社会人基礎力は、社会の一員として活躍するための能力であるため、その具体的な指針の一つになりうるのであろうが、その育成をPBLによって試みた教員養成系大学における育成事例は少なく、社会人基礎力に関する能力要素や評価項目などの有用性を確認（および、改訂）するに至っていない。おそらく、社会人基礎力で扱われるような基本的な能力ではなく、「専門職」としての教員や保育士の資質の育成に焦点が合わされているためだと思われる。

また、大学進学率の上昇と少子化による学生人口の減少が同時に進行する社会状況をふまえて、それぞれの大学における学生の実情（基礎学力、勉学意欲、職業志向など）とあわせて、社会人基礎力の育成を考える必要性もあるだろう。上述したように、社会人基礎力の向上が専門知識・基礎学力への修得への意欲につながり、専門知識・基礎学力が一定レベルに達した後、社会人基礎力の向上により、専門知識・基礎学力も問題解決プロセスを経験することでレベルアップすると考えられている。そのため、教員養成の現状や大学教育を取り巻く時代背景を考慮すると、その育成は非常に重要になる。

つまり、教員養成・保育士養成に特に重要となる、社会人基礎力の能力要素項目における重点の置き方や具体的な達成目標、および、それぞれの評価項目の考案、そして、場合

に応じては、専門職としての教員の資質の育成をふまえた新たな項目の付加などの改訂が必要となる。そして、学生個々の資質能力を理解した上でのPBLの運営が求められるだろう。その結果、社会で求められる社会人として、そして、専門職としての「せんせい」の育成につながると考えられる。

今後の課題としてあげられるのは、学生が、げんき村わんぱく通りの企画・運営に携わることで、実際に社会人基礎力の形成につながっているかどうかに関する教育効果を検証することである。残念ながら、その測定に必要な社会人基礎力測定に関する尺度についてはまだ信頼性や妥当性が十分に検討されていないのが現状である。今後は社会人基礎力自体について、そして、それに関する心理特性について様々な側面から実証的に研究する必要があるだろう。

また、学生の主体的な活動にも大学教員や大学組織のサポートは必須となる。よって、このような活動が急速に増加する中、それを支える教員の役割の重要性もますます増加している。特に、PBLにおいては、指導する大学教員の専門知識や指導法によって、その教育効果が異なることが想定される。加えて、大学組織には、専門知識や基礎学力におけるより一層の向上をもたらすようなカリキュラムの充実が求められる。このような体制を整えることで、学生の主体性をはじめとした社会人基礎力、および、専門知識や基礎学力の循環的な成長が促進されると考えられる。

高松大学発達科学部では、第2節で述べたように、学生や教員の間に、学生が主体となって活動し、それを教員が支えるという意識形成がなされ、学生の主体性が育成されるような文化が発達科学部に根付きつつある。今後も引き続き、発達科学部の卒業生から地域で活躍できる質の高い「せんせい」を輩出するためには、教員養成・保育士養成に関わるカリキュラムを構造化し、より一層の充実を図るとともに、実際に地域において学生の主体性が発揮されるような活動をさらに推進することが重要課題となる。

7. 謝辞

これまでの「げんき村わんぱく通り」、また、それに関連する諸活動にご協力いただいた高松大学発達科学部の教員の皆様、高松短期大学保育学科の教員の皆様、高松大学・高松短期大学の事務職員の皆様に深謝いたします。

*本事業は、日本私立学校振興・共済事業団 私立大学等経常費補助金特別補助 平成22年度総合的な地域活性化事業支援（地域における社会貢献事業支援）補助事業「地域に根ざした教育者としての社会人基礎力の育成」によるプロジェクトである。また、このプロジェクトの一部は、「明治百年記念香川県青少年基金 子どもの読書推進活動支援事業助成金」によっても支援された。

引用文献

- 中央教育審議会（1996）. 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（答申）
中央教育審議会（2006）. 今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）
中央教育審議会（2008）. 学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）
経済産業省（2006）. 社会人基礎力に関する研究会―「中間とりまとめ」―
経済産業省 編（2010）. 社会人基礎力育成の手引き 朝日新聞出版
向居 暁・田中美季・松原勝敏（2008）. 高松大学発達科学部における学生による学外セミナーの企画・運営―「君に見せたい子ども発達がある」というテーマのもと― 高松大学紀要、50、201-223.
人間力戦略研究会（2003）. 人間力戦略研究会報告書 若者に夢と目標を抱かせ、意欲を高める―信頼と連携の社会システム―

研 究 紀 要

第56・57合併号

平成24年 2月25日 印刷

平成24年 2月28日 発行

編集発行 高 松 大 学
高 松 短 期 大 学
〒761-0194 高松市春日町960番地
TEL (087) 841-3255
FAX (087) 841-3064

印 刷 株式会社 美巧社
高松市多賀町1-8-10
TEL (087) 833-5811